

西尾美也さんのレクチャーから考えたこと

Thoughts led by Dr. Nishio's Lecture

金山智子

KANAYAMA Tomoko

本稿では、西尾美也さんに本学でのレクチャー“アートとアクティビティの境界がない新しい表現活動”を依頼した経緯を述べ、実際に西尾さんのレクチャーから何を得たのかを提示する。

1. 玉島での出会い

2014年6月、猪熊弦一郎現代美術館の「あそびのつくりかた」を鑑賞した帰り、大月ヒロ子さんが岡山県玉島で開設しているIDEA R LABを訪れた。ちょうど、LABでは「町を縫う」と題したワークショップが開催されており、飛び入りで参加させてもらった。そこで出会ったのが現代美術家の西尾美也さんによる、玉島の新しいテキスタイルを作る連続ワークショップだった。そのユニークな発想とそれが投影、展開された「面白い形にカットされた様々な色と柄の布たち」に目を奪われた。好きな布を選んで大きな布に縫い付けている参加者たちのアクティビティに触発され、私自身も参加したいという気持ちが湧いてきた。

作業しながらプロジェクトの趣旨を大月さんから聴き、その背景に流れる着想の面白さ、豊かさに改めて惹かれた。当時、私はイアマスで岐阜県恵那市岩村や美濃市うだつの町並みなど、古い伝統ある町で表現活動の研究実践を行っていたが、こういった発想は私が考えるべき次のステージのあり方を想起させた。大月さんからその場で西尾さんを紹介してもらったが、西尾さんは参加者と一緒に黙々と裁縫作業をしていて、ワークショップの場にジャージ姿で創作する彼の存在は、その場に自然に溶け込んで意識できない。



玉島のワークショップ

不用になった卓球台をリユースした大きなテーブルで、小さな子どもからおじいさんまで幅広い世代の人たちが思い思いに「ちくちく」と縫う作業は、いつの間にか参加者を共同製作者という関係性へと変えていた。アートワークの参加者が縫い付けた布に、さらに自分が好きな布を縫い付けて、少しずつカタチになっていくのを見るのは楽しい。それは、町に存在し、その場を体感した人だけが切り出したモチーフだという意味の付与が感じられるからで、それが新しい町のカタチとなって提示されていた。かつて紡績が盛んだった玉島に残された布を使うことで、大月さんがすすめる「クリエイティブ・リユース」という思想が、社会化されたアートとして反映されている。大月ヒロ子×西尾美也という二人のクリエイターによる「町を縫う」プロジェクトは、これまでとは違う「新しい町をみんなで作る」方法の可能性だけではなく、現代アートに対する考え方も、社会化されたそれぞれの場で創れると感じさせる貴重な機会だった。

パンフレットを持ち帰り、担当していた「美濃のいえプロジェクト」メンバーの入江経一元教授や学生たちに説明し、西尾さんをプロジェクトにゲストレクチャーとして招聘したいと提案した。学生たちは強い関心を示し、いつもはこういったプロジェクトに厳しい入江教授が、「これは素敵なプロジェクトだなあ」とコメントしながらパンフレットにあるフレーズを興味深く読まれていたことが思い出される。

町を縫う

町の柄が一枚の布に縫い付けられる。

一枚の布は縫い合わされて服になる。

縫い合わされた服は町の人々に着られる。

服を着た町の人々は一枚の町に縫い付けられる。

一枚の町は縫い合わされて柄になる。

縫い合わされた柄は服の人々に着られる。

町の柄が、服が、人々が、縫い合わされて、新しい町のかたちになる。

昔の町の風景を保存して図案化する。

昔の素材を使いなおして新しい町の素材を作る。

昔の町と新しい町が、町の人々の体の上で出会う。

町と、素材と、人々が、縫い合わされて、町が動き出す。

西尾美也

それ以降、西尾さんを「美濃のいえプロジェクト」に招聘する機会を探っていたが、その実現までに思いのほか時間が掛かってしまった。

2. 神戸での再会

2014年11月に、英国 Royal College of Art (RCA)のフィオナ・レイビィさんを講師に招いたワークショップが本学で開催され、その成果は2015年2月に開催された神戸芸術工科大学のインタラクティブデザインプロジェクト2015で展示された。その時、西尾美也さんの「ファッションスケープ・デザイン」特別講義も行なわれ、私はここで初めて現代美術家の西尾さんが実践して

きた、さまざまなプロジェクトについて知った。

2011年に東京藝術大学大学院の先端芸術表現領域博士課程を修了した若手美術家の西尾さんは、「装いとコミュニケーションのあり方」をテーマにさまざまなプロジェクトを実践してきた。

「ファッション、あるいは装いはある種のコミュニケーションを担う一方で、あり得たかもしれない別のコミュニケーションを遮断しているのではないか」という問いから、「装いが閉ざしているコミュニケーションを装いによって取り戻す」ことを目的としたアート活動を続けている。

プロジェクトの詳細については、本誌掲載の西尾さんのレクチャーを読んでいただきたいが、例えば、世界のさまざまな都市で見ず知らずの通行人と衣服を交換する《Self Select》、世界各地の巨大な喪失物（鉄道や産業など）を古着のパッチワークで再建する《Overall》、図書館の本のように借りられる古着の公共的なワードローブ《Pubrobe》など、装いのコミュニケーションは個人から社会のアクティビティにまでわたる。私たちの固定概念を超えて、物事を疑うことすらないということ、そして、疑うという行為は批判的ではなく、むしろクリエイティブであり、これまでと違うコミュニケーションを誘発あるいは創出していくものだとすることを西尾さんの講義から学んだ。



神戸レクチャー&トーク

講義後に西尾さんと再会し、実践してきたプロジェクトや西尾さんの考え方、発想について意見交換した。そして私は、当時抱えていた悩みを打ち明けた。それは、私が指導する学生たちが、自分たちなりに考えた表現方法を使って、違ったコミュニケーションや新しい場を創出するような活動をテーマとしているものが多く、それを提示する際、常に、その展示の段階で問題を感じることが多かったことに起因していた。「これは作品ですか」という問いに、学生は「活動です」と応えるしかなく、教員たちからは「活動ならば論文でいい」との批評、批判を受けることがあった。つまり「作品」という形態にそぐわないと評価されることが、そのまま批判の対象となってしまうのである。

論文で報告すれば充分という考えも理解はできなくはない。しかし、だからといって「活動を展示してはいけない」という理由もないのではないかと。私自身、活動もクリエイティブな表現で

あり、むしろ、これまでの作品や展示に対する固定概念を超えられないか、またこのような考え方を理解してもらうためにはどういった展示の仕方があるのかと悩んでいた。西尾さんのプロジェクトはアートというより活動と位置づけられると感じ、同様な悩みを抱えた経験はないのか、と西尾さんに単刀直入に聞いてみた。西尾さんは、即座に「そこは本当に悩みなんです」と答えた。「どうしたらいいのでしょうか」と、私は追い打ちの質問を浴びせた。「一緒に考えましょう」と、西尾さんは、再び即座に答えた。私にとって、これは驚きであり、嬉しい言葉だった。

3. IAMAS でのレクチャー

2015 年 11 月、念願の西尾さんのレクチャーを開催することになった。この実現には、同年 4 月からイアマス教員となった松井茂さんの貢献もあった。心強い同僚教員のサポートを得ることで、西尾さん招聘が遂に実現した。レクチャーのタイトルは、西尾さんと相談して「アートとアクティビティの境界がない新しい表現活動」とした。以下、西尾さんのレクチャーで考えたことを大きく二つにまとめておく。

(1) オルタナティブな考えや仕組み

単なる批判の提示ではなく、「別の違ったもの」を創っていくことが重要である。現在ある仕組みや考えそのものに対して疑問をもつことが新しいものを生み出す出発点となることは多い。しかし、それは単に批判で終わらせない。また、現在あるものを壊し、新しいもので換えていくということではなく、むしろ、今あるものとは別のもの、つまりオルタナティブなものを創造していくことが重要である。これはアルビン・トフラー(2000)が『富の未来』の中で、現代の巨大な経済システムに対し、もう一つ別のシステムをもつことがこれからの未来に必要であると述べていることに通じる。この小さな別のシステム、あるいは、考え方や思想こそが、大きな一つの歯車で回っているグローバルな消費経済社会の中で、生産消費経済など複数の違った歯車を生み出すことを可能にさせる。服を選ぶ、服を着るといった日常的な小さな装いの行為は、実はモードという現代の消費経済を動かす根本的概念と深くつながっている。西尾さんのプロジェクトは、自身の個人的な問いを社会的な実践へと開いていく。その発想の芽の多くは、例えばアフリカの装いの仕方やモノの運び方といった、現存する違う社会の中から得ている。トフラーは物々交換という古来からある仕組みを未来の経済システムにみた。オルタナティブな小さな歯車を社会に生み出していく表現活動の種は、私たちの周りに存在しているあらゆるものの中から得ることができるという考え方は大切であり、トフラーの考え方ともシンクロするものだろう。

(2) 社会へ介入するアートでありアクティビティ

西尾さんの実践は、社会の中に介入していくアート（技法）でありアクティビティであり、そこに境界を見出すことは意味がない。プロジェクトに参加する人たちは、身にまよったり、真似したりするという、分かりやすい行為を通して、現代社会の仕組み、特にモードという強固なシステムから自身を、意識せずに解放していく。最初に、既成概念に囚われて「これでいいのか」といった批判的な視点や態度をもつのではなく、「とりあえず楽しそうだからやってみる」「これまでと違うから面白そう」という自然体な姿勢で入り、結果として、違うことを楽しみ、それを肯定するという出口を自らみつける。これこそが、固定概念や解釈に対する批判的な投げかけにつながっていくのではないだろうか。



IAMAS レクチャー

疑いもなく服を選び、買い、纏う人たち。造られては壊されていく町の風景を見続けている人たち。自分も含め多くの人々は、自分が着るものや住む町を気にするが、それはあくまでも現代の仕組み上での出来事なのである。違う服の装い、違う町の装い、それらをこれまでとは違う考えで創ってみることから始める。アーティスト自身のもつ強いメッセージを自分の表現にこだわり伝えていくことは重要である。同時に、社会に介入させていく、いわゆる社会とのインターアクションを受け入れることを考える上では、いかに普通の人たちが強い違和感や抵抗感を持たずにやれるようなカタチへと昇華し、展開させていけるかが大切になる。関心の低い人や接点のなかった人たちを対象にアクティビティとして実践し、社会において既存の固定概念や仕組みの中で生きている私たち自身を内破させていくことを可能にする。それが、小さなクリエイティブな歯車を生み出す社会的な動機や運動にもつながる。

4. 新しい展示のあり方

今回の西尾さんのレクチャーは、予想以上に多くの気づきを与えられる機会となった。自身の問いを他者に開き、さらに社会に介入させていくためには、自分自身のプロジェクト、社会のプロジェクト、より一般の人たちに分かりやすくするような事業など、複数のプロジェクトを同時に展開させていくことが大切だとの気づきも与えられた。また、既存の固定概念を内破させていく上で、教育が非常に重要かつ有効であることを再認識させられた。さらに、組織におけるさまざまな固定概念を内破していくコミュニケーションを考える機会ともなった。

最後に、西尾さんを招聘した理由、アートや活動の境界のない表現活動の展示について述べたい。西尾さんも、学生時代に仲間や教員からこういった表現活動をなかなか理解してもらえなかったこと、今でも展示では理解されるために工夫していると話されていた。展示はあくまでも表現活動を他人に伝えていく一つの手段に過ぎない。しかし、重要な手段であることも確かだ。それは、作品が何を伝えるのかではなく、表現活動の一部を提示することで、その向こう側にある違った社会を想起させていくからだ。同時に、そこに参加した人にそこで触れた新しい考えや価値観について一緒に考えてもらう機会へとつなげていく可能性がある。展示は、参加者が表現活

動を覗く一つの入口であり接点であり、その意味においてとても大切なのである。展示者自身は当然であるが、展示をみるものにもこういった展示のもつ意味と一緒に考え理解してもらうことが求められるだろう。

西尾さんの「一緒に考えましょう」という言葉が、小さな歯車を創る人たちをつないでいくということの大切さを痛感させる。共創という言葉よりも、はるかに優しく、強いことばである。自分も「一緒に考えましょう」という言葉を大切に、イアマスで小さな歯車を創ることに取組んでいければと思う。